

嘉永五年 菅公九百五十年御忌の諸相

中 澤 伸 弘

一

幕末の嘉永五年は菅公菅原道真の九百五十年御忌に当たった。江戸の神田の名家である齋藤月岑は其の著『武江年表』の嘉永五年二月の條に

今年、菅神九百五十年の御忌辰にて、諸所の天満宮開帳あり（二月十五日より三月二十七日迄、亀戸天満宮開帳○同二十五日より六十日の間、平河天満宮御真筆の御影開帳○閏二月十五日五十日の間、小石川牛天神開帳）……○同七日、八日亀戸御嶽社に於いて、菅神御真筆等高貴の御筆、御神号、御神影、其の外名家名筆の御神影、神号等諸家の蔵せるもの数幅を借り得て拝せしむ。（催主糸川尚章、板橋定時、補助山名行雅、

関口定真といふ人なり。）

と書いた。九百五十年の節目の時に当たり、江戸の諸天満宮で開帳が行なはれたことが伺へる。このやうな巡り会はせの年ゆゑ月岑も開帳に出掛けたのであらうが、残念なことに月岑の日記（東大史料編纂所編「大日本古記録」所収）の嘉永五年の部は残つてゐないのでその動静はわからない。江戸でかうであるのだから全国的に見たら様々な行事が執り行なはれたことと思はれるが、どうであつたのであらうか。幕末の政情不安定の中において菅公がどのやうに捉へられ、またこの時にこれに関連してどのやうな記念の事業がなされたか、その諸相の一端を挙げて考へてみたいと思ふ。



図 1

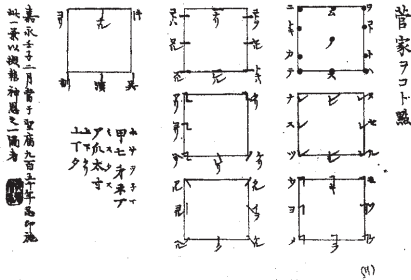


図 2

二

東京大学総合図書館蔵本の『拵拾帖』は幕末から明治初期にかけての一枚刷りの刷り物の張り込み帳である。瓦版や暦、菓子や引札など実に雑多なものがかなりの量収められてゐて、この時期の庶民の暮らしがよく分かる好資料である。この中に「北野ミやげ万燈圖」なる彩色の一枚刷りがある。（図1）これは京都の北野天満宮に係る刷り物である。菅公ゆかりの梅と牛の絵を正面に据え、右側にその万燈を描き、胴の部分正面に「九百五十年御忌」、側面に「嘉永五年子二月初日ヨリ廿五日迄」とある。二十五日間万燈を灯すことの案内のやうであるが、明らかに九百五十年御忌に因む刷り物で、参詣を促す引札のやうでもある。万燈圖と言ふ土産物の上に掛けたものかもしれない。万燈（マントウ）圖は饅頭（マントウ）のことかと勝手に思つてみたりする。土産屋もこのやうにして九百五十年御忌の参詣を促してゐたのである。

この『拵拾帖』同様な刷り物の張り込み帳に、名古屋の蓬左文庫にある『鶏肋集』がある。これも幕末期の庶民の暮らしがよく分かる好資料である。この中に「菅家ヲコト点」と題する一枚刷りがある。（図2）ヲコト点

は漢文を読み下す時に助詞にあたる語を書き込む煩雑さを避けるために漢字の特定の位置につける点で、その点の位置によりどの助詞であるかを示す点である。この刷り物は一瞥すれば単なる「ヲコト点」の解説一覧のやうなものだが、左脇に「嘉永壬子二月 當于聖廟九百五十年忌 印施此一葉 以擬報神恩之一滴者」とあることから菅公九百五十年御忌の報恩の為にこの一枚を印刷して配つたと言ふことがわかるのである。この下に印が捺してあるが、尾張までは読めるが後の二字が判読不能であり、これの作者が誰かは定かではない。何れにせよ漢学に関する素養のある識者が菅公の学恩に感謝して、九百五十年の御忌に関して、その記念に刷り物として門弟に配布したものであらう。この配布を

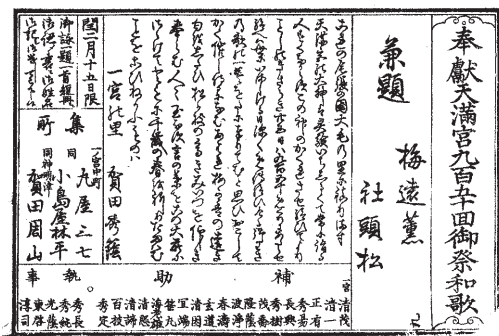


図 3

受けた漢字と縁遠い人もこの年が菅公の九百五十年忌である認識をもつたことであらう。また同じ『鶏肋集』に「奉獻天満宮九百五十年御祭和歌」と題する一枚刷りがある。(図3) 尾張大毛の天満宮に九百五十年忌にあたり歌を奉納しようと、一宮の賀田秀蔭が呼び掛けた刷り物である。兼題は梅遠薫、社頭松の二題である。短冊に書いて二月十五日までに一宮の丸屋三七、小島屋林平、賀田周山の何れかにお遣はし下さるべく候と言ふものである。これなどは尾張の一地方の天満宮に歌を奉る動きがあつた証しである。刷り物として呼び掛けた以上、多くの短冊が集まつたと思ふが、今はどうなつてゐるのか不明である。賀田秀蔭は富樫廣蔭門下の歌人で一宮の医師である。長歌を得意としたのか、『尾張名所圖會』の真清田神社の条に長歌とその反歌が記されてゐるし、尾張若宮で虎を見たことを長歌にして『看虎歌集』と題するものを刊行してゐる。天満宮があり、歌への理解がある人物がゐれば、此の時を期してこのやうな営みが地方でも行はれたことを察することができよう。

三

一枚刷りに関して更に言へば、東京都立中央図書館の特別文庫室(加賀文庫)に「自在天神地名録 諸所天満

宮九百五十年忌開帳独案内」なる一枚刷りがある。(図4)これも菅公の九百五十年御忌に因む刷り物で江戸の天満宮を番付の形で書いたもので、欄外上に「自在天神地名録」、右に「新板 山キ 菊栄堂板」、左に「諸所天満宮九百五十年忌開帳独案内」とあり、中央に「天満宮行事湯嶋東北野天満宮 年寄平川菅原天満宮 上野山下五條天満宮 小石川牛天神 勧進元龜戸東宰府天満宮 菅神梅園大権現 靈宝天閑寶剣」とある。その左右に三十八社毎、都合七十六社(中央の五社を入れれば八十一社)の江戸市中の天満宮の名が書かれてゐる。この記載



図 4

順は地域ごとではないので巡拝のためのものではないことがわかる。番付の形をとるので天満宮の格式や由緒の順とも考へられるが、その多くが寺院の中の小さな天満宮であつたりして、さうでもないやうである。このやうな番付を作つたのも九百五十年の御忌に關してのことである。

江戸の天満宮の巡拝に關しては、この年に巡拝の案内書が刊行されてゐる。これは『御府内菅神社記』と題する十丁余の冊子で、東京の龜戸天神社の所蔵である。これには次のやうな序文がある。

此大江戸に菅神の御社をあげめ奉りし所々をなん
小林氏の人委しくたづねしるしたるを われ若かり
しときゆくりなく求め得たり もとより信心のこと
なれば 同じ志の人にもしらしめてむと 年頃おもひ
ながらうち過しつるに光陰はやく世のならひ いっ
しか老の身となりて はや今年は此神の九百五十年
忌に當らせ給ふなれば笈のうちより尋出して 少し
く補ひ 今やうやうに櫻木にありたるなり こゝろ
ざし深きともがら此数々の御社をたづねてぬかづき
給はゞ我もまたよろこび少からじ

嘉永五年二月 浅□翁しるす

これによると江戸の天満宮の巡拝について、先に小林

氏が書いたものがあり、若いうちに手に入れてあつたが、信心のことなので多くの人に知らせようと思ひつつも、いつの間にか時が流れ、老の身となつたが折りしも今年には九百五十年忌にあたるので、取り出して少し訂正加筆して出版したとのことである。時恰も「嘉永五子年二月」であり、『武江年表』にある通り諸所で開帳が行なはれてゐた時である。編者の名の「浅□翁」の一字が判読できないのが残念である。(図5) 小林氏が書いた天満宮参拝の案内については不明だが、この冊子には「湯島北野勧請之始祖」からはじまり、江戸市中の百六

图 5

十七社のもの菅公関係の神社が記載されてゐる。かなりの数があるが、寺院の中の祠であつたり、天満宮として獨立したものではなく神社の相殿にお祀りされてゐるものや、「新吉原江戸町一丁目大坂天満御同躰竹嶋氏」「西院天満宮西村氏」「深川木場鹿嶋氏」「御真筆天神小川町半井家」「向嶋新梅屋敷」などと個人の邸宅の天満宮までも網羅してゐる。中でも高田の「穴八幡地内尋るに社見へず 何れに 相殿か」などとの記載は実地踏査したことが分かる表記である。それにしても細かな調査がなされたものと思ふし、寺院の中の天満宮など維新後には廃絶したものも多く、別の意味で幕末期の江戸の天満宮資料ともならう。この中で特に「湯島北野勧請之始祖」、小石川「惣社牛天神」、麹町平河天神初雁社」「龜戸太宰府勧請之始祖」、の四社には○が付き格別な扱いであることを示されてゐる。

また神田へ戻り神田本銀町、日本橋、鋺炮洲、筑地、浅草、下谷、千住、本所、深川、向嶋、隅田村を経て最後は龜戸東宰府近辺にて終る経路である。序文にも「御社をたづねてぬかづき給はゞ我もまたよろこび少からじ」とあつたことから明らかに巡拝のための案内書であり、実用品であつたためか稀少なものとなつてゐて、国文学研究資料の電子版古典籍総合目録にも記載はない。これを手に江戸の諸所の天満宮の巡拝が行なはれたことが思はれる。

四

天満宮の二十五箇所巡拝は京都では洛陽二十五天神などと称して古くから行なはれてゐて、その巡拝の案内の刷り物が手許にあるし、伊勢の宇治山田で行なはれてゐた巡拝案内が手元にあるが、それには天保十年とある。二十五は菅公所縁の数である。江戸の二十五社天満宮の巡拝については平田篤胤の『天満宮御傳記略』に見える。

この本は篤胤在世中の文政三年十月に刊行された。従来の「北野天神縁起」のやうな仏教的な菅公の伝とはまた違ひ、諸書を抜き書きして、北野天神の御鎮座、各家庭での天神祭祀についてなど神道的なものを考へての著作であつて、この中に江戸の天満宮が二十五社しるされてあ

つてその参拝を奨励してゐる。実はこの本は天保七年の江戸の大火で板木を消失したのであつたが、その再刻版が出羽能代の門人たちの助力で嘉永四年の年末に刊行されたのであり、翌年の嘉永五年の九百五十年御忌を意識したことと伺はれる。歴史民俗博物館の報告書一・二八所収の『気吹舎日記』の嘉永四年の十月二十日条に木村嘉平からこの板木が納品されたことが見える。篤胤既に亡くして八年、後を嗣いだ平田鉄胤率いる平田塾の商魂も見え隠れするものだ。内容は全く同じであるが、戸倉胤則の序跋文が新たに付け加へられてゐる。この「御府内また御府内近辺なる社々」はある人が述べたものとしてゐるが、麴町の平河天満宮からはじまり龜戸天満宮に至る二十五社である。東都の天神参りは遠藤泰助の『天満天神の教育史的研究』によれば古くは七社参りとして行なはれてゐたと言ふ。

また菅公ゆかりの図書の刊行としてはこの年に『菅家遺誡』の刊行がある。「凡そ仁君の要政」からはじまる『菅家遺誡』二巻一冊は子孫や廷臣に対する戒めの文章が三十四条が綴られたもので、中には和魂漢才のありかたにも及んでゐる条がある。早くに『群書類従』に収められたが、一冊の書物としてこの嘉永五年に別当寺曼珠院本によつて京の北野天満宮の松園坊から刊行されたの

である。これも九百五十年忌にあたつてのことであつた。
(この年に刊行された『菅家遺誡』には序文等が違ふ異版がある) 今日では菅公に仮託された書物とも言はれるが、ある意味での菅公の思想的な著作を嘉永五年と言ふ時期に刊行する意義があつたやうである。「国学」や「和魂漢才」と言つた文字が竄入され、それが独り歩きして、勤王の精神を鼓舞することに繋がつたのである。序文に北野寺の法要院僧正光通がこの国学、和魂漢才の「要文二則」を重要なこととして協調してゐる。この九百五十年忌に大坂の天満宮の境内に菅原信古(大橋法橋)によつて「和魂漢才」の碑が建てられた。これは、これに先立つ嘉永元年四月に東坊城聡長の手になる「和魂漢才」の碑が座田維貞によつて北野天満宮建てられてをり、この模刻のものである。先の正光の序文にもこの事が記してある。(嘉永四年には京の神護寺の和氣清麿の墓の側に関白鷹司政通の手になる「和魂漢才」の碑が、これも座田維貞によつて建てられた。)これらの建碑はみな九百五十年忌に因むものである。これらの『菅家遺誡』の刊行や建碑に刺戟を受けたのか大宰府でも安政五年七月に「和魂漢才」の建碑があり、文久になつてから『菅家遺誡』が刊行されてゐる。大宰府版の序文に菅原為定が「遺誡二巻 稿藏京師曼殊院及筑之大宰府」と、その所在を示し、京師の

ものは先に既に刊行されたと書いたのはこのことであつた。跋文に法印信全が「和魂漢才の文字あるを千引の石にゑりてこの広前にたてまつらせつ。」と安政の建碑のことを触れてゐる。菅公を祀る神社を拝み、著作、または建碑などをしてその尊皇の氣風を尊ぶことにより過去の天神菅原道真像からまた新たなものへ転換する時期でもあつたやうである。

五

歌集である『菅贈太政大臣歌集』の刊行もこの嘉永五年であつた。

菅公は当代随一の文章博士として名を馳せ、その詩文は人の知るところであり、その文章を載せる『菅家文草』は出版もされて広く読まれた。その詩文に対して、菅公の御歌はさまで多くは伝はつてはゐない。平安初期の男性の教養が専ら漢詩文にあつたからであらうか。ただ国史上、菅公の御名が著名なため、菅公に仮託されて世に流布してゐるものもあり、その真偽が分からない歌がある。

菅公の御歌については徳川時代中期になつて注目され、文化十二年に鱸(穂積)貞治がその歌を編輯して『菅原贈太政大臣歌集』として刊行してゐる。しかしこれもな

は不十分なものであつたやうで、江戸の歌人である仲田顕忠が仮託された歌を排し、『古今和歌集』ほか十二種の歌集から、明らかに菅公の御詠とされてゐる歌四十七首を纏めて刊行したのが『菅贈太政大臣歌集』である。顕忠は跋文に「世にこの公の歌となふるもの大かたは後人のつくれるもの也 ゆめゆめまどふべからず」と菅公に仮託され流布してゐる歌の存在に注意を促してゐる。この本は所謂半紙本の大ききで、表紙一丁、全六丁のさやかな歌集であるが、実証性のある菅公の歌を一冊に網羅したものとなつてゐる。

見返しの内表紙の書名の脇に「東宰府蔵梓」とあり、「東宰府神庫印」と判が押されてゐるので、本書は龜戸天満宮から刊行されたことが分かる。（製本所は誠格堂とある。）しかも刊年は嘉永五年二月とあり、九百五十年に当たつてゐてその記念出版であつた。

興味深いことは本書には同じ顕忠の編になる同じ書名で、全く別の本があることである。こちらは大ききが一回り大きく、所謂大本で、丁数も二十五丁あり、ものによつては折本帖仕立のものもある。これは先の四十七首の菅公の歌を半丁に一首ずつ、青蓮院御流の書家猪瀬尚賢が書いて書道の手本として刊行したものであつた。手許のものには「竹口貞齋謹刻」とあつて、手習ひの本の

為書体を重視したからか、この版木彫りには幕末の名版木師が携はつたことが分かる。巻末に「右菅公歌集為誠格堂之属 書一通以為徒弟楷式 豈止擬字樣亦足以知國歌之大旨矣」と尚賢の跋文があつて、歌集を刊行した誠格堂の願ひを受けて門弟の書道教範として書いたと言ふのである。菅公は学問の神様と言ふより寺子屋の書道の神とも見做されて信仰されてゐたわけで、九百五十年御忌にこの歌集と手習ひの書を刊行するのも一つの意義があつたと思はれる。

青蓮院御流は青蓮院御門跡であつた尊圓法親王がお始めになつた書道の流派であり、御家流、栗田流とも称される。幕府がこの書流を公文書に採用したため、徳川時代には公用の文字として大いに流行し、寺子屋でも手本とされた。筆者猪瀬尚賢は幼少時には一文字も知らぬ子供であつたのを、努力して書道の師となつた人物で、幕末期に多くの書道手本たる往来物を書いてゐる。このやうに彼は能筆家であつたが歌人ではなかつた。だがその八年後に顕忠が編んだ類題歌集『武蔵野集』二編（安政四年刊）に四首の歌が採られてゐる。これはこの時の顕忠との関係によるのかもしれない。

六

最後に手許にある『天満宮九百五十年御忌法楽和歌』について書いておかう。この本は国文学研究資料館の電子版古典籍総合目録によれば写本が一冊、西尾の岩瀬文庫にあるのみである。それを清書本とするなら、架蔵のものはその草稿のやうである。こちらには岩瀬にない序文があり、香川景恒の几帳面な文字で、九百五十年御忌法楽和歌が百首書かれてゐる。この成り立ちに関しては岩瀬本にない源（中澤）重樹の序文が手許の本にあるので、長いが次に引いておく。

いにし嘉永五年はかけまくもかしこき天満御神の九百五十年の御正忌にあたらせ給へるとて都北野をはじめ江門亀井戸筑紫太宰府にて大祭行れ侍るよしおしなべてうれしみよろこほひ侍りけり　さるが苑に御神の御苗裔にかかれる大内の自卿　外藩の刺史をはじめ八十氏百姓の人々尊きも卑しきもおのおのも幾千萬の捧物幾千萬御燈をかかげ奉りて　猶御神徳を耀し奉りけるその御よそほひ尊しともめでたしとも心も辞も及ばずとなむ伝へ承り侍りける　さるからに我桂園主人陸奥介景恒君百首の和歌を勧進し、法楽し奉らんとうちうちおぼしたたせられつる

に　萩原貞起百瀬篤雄河野通重など御祭をかけとて上洛し侍りつるをやがて歌詠みに登られて俱に　神慮をなぐさめ奉りしは尊しともかしこしともまたなぐめでたき幸になん侍りける　園中に契つる友かき幾千にか侍らんと　此事にあづかれるはもちがひとつ希なりも希ふる幸にして　御神のめぐしとみそなはし守らせ給はんずらんと思ひ奉るにもかへすがへすうらやましき事にこそ思ひ給へられ侍れ　其後景恒君手づからその百首を書せ給ひて　遙々通重がりおくらせ給ひたるを　やがてもて来りて見せられぬ　其歌のえんにおもしろきはさらなり　水茎のあとめでたくうるはしきをあなあなとめでたたへて掌にのせ頂き　げに文道之太祖和歌之本主と仰れさせ給へるからに　なほ此道を守り幸ひ玉はんずらんとかたじけなしとも尊しともまをすに　詞もあらざなんおぼえ侍りける　程へてまた齋し来りていへらく此一巻永なにひめおかまくほりて　終にこひえたり　そのよいしささか書てよとこふ　故つたなきをかへりみず凍筆をとり侍り　おもふに通重壮季なれば千年の御祭にも猶まさきく在て又法楽し奉るべし　其時この巻を捲れたらむにはいかばかりの感情をおこさるらんと羨しくもゆかしくも侍るがにおも

ひやられ侍るままのわざくれになむ あなかしこ

安政紀元十二月廿五日 源重樹 誌す

これによれば九百五十年忌にあたり北野天満宮において香川景恒がその法楽和歌を行なひ、一人二首の五十人、計百首の歌を一冊に纏めたものであると言ふ。巻末に「嘉永五年閏二月廿五日 陸奥介平景恒謹書」とある。出詠者は香川景恒はじめその門人、または周縁の人物で鈴鹿連胤、大倉好斎、税所敦子などが見えてゐる。香川景恒は巻末の巻軸歌に「寄道祝」の題で「真心のしをりさだめてしきしまの道引たまふ神はこの神」と詠んでゐる。先の重樹の序文に菅公を「文道之大祖和歌之本主」と称へてゐたが、この歌にも「しきしまの道引たまふ神」と詠まれてゐるのである。歌人にとっては菅公の九百五十年忌はその神徳を称へ益々の歌道精進を期して祈る時と認識されたのである。

七

嘉永五年は下田に露西亜船が入港した年でもあり、翌年には米国の黒船の来航が控へてゐた。その一方で明治天皇が御降誕されたのも九月のことであつた。弘化、嘉永と時代は大きな変化を強ひられつつあつたが、其の時代の潮流の中においての菅公の九百五十年忌であつた。

今日では学問・入試の神様となつてしまつたが、本来怨霊の神として奉祀された菅公であり、時代の変遷において特に徳川時代には手習ひや学業、和歌の神ともされたのであつた。幕末の政情不安定な折に、或はまた国の守護神とまで昇華するには至らなかつたとしても、人々はこの九百五十年の祭儀に何かしら関与しようとしたやうである。

以上手許にある幾つかの資料を基に嘉永五年の御神忌の諸相を述べてみた。図書の閲覧複写にご協力いただいた龜戸天神社の大鳥居武司宮司、東京大学総合図書館、蓬左文庫、都立中央図書館に厚くお礼申し上げます。このような資料は探すとまだ幾らでもあるかもしれない。大方の御教示を乞ふ次第である。

（東京都立小岩高等学校主幹教諭・國學院大學兼任講師・博士神道學）